

研究論文

## 1940年と1964年の〈東京オリンピック〉と台湾人選手<sup>1</sup>

菅野敦志（名桜大学）<sup>2</sup>

### Abstract

This paper examines Taiwanese track and field athletes in the past two “Tokyo Olympics” : the first Tokyo Olympics was scheduled to be held in 1940, but was unrealized due to the escalation of the Sino-Japanese War; and the second, held in 1964, was literally the first Olympic games to be held in Asia. The Taiwanese athletes discussed in this paper are: Chang Hsin-hsien, Lin Yue-yun, Kacaubunloh, and Rakehnamoh from the Japanese colonial era, and Yang Chuan-kwang (C.K. Yang), Wu A-ming, and Chi Cheng from the postwar era under the rule of the Republic of China.

Unlike the postwar Taiwanese athletes who were able to win medals before and after the Tokyo Olympics in 1964, athletes in the prewar era could not win any medals in world class sports tournaments, which caused the latter to be easily forgotten in the collective memory of the public. However, this paper tries to shed light on those long forgotten Taiwanese athletes, especially revealing the presence of the indigenous Taiwanese athletes who could be seen as the pioneers of aboriginal participation in sports in Taiwan during Japanese colonial era. By examining Taiwanese track and field athletes in the two “Tokyo Olympics”, this paper clarifies and underscores the importance of linking histories before and after 1945 and binding the divided collective memory in Taiwan between the Japanese and Postwar eras, to explore the subjectivity of the Taiwanese people.

### 抄録

本稿は、未実現の1940年および戦後開催された1964年の二つの〈東京オリンピック〉のなかに確認できる台湾人選手、特に陸上競技の選手に焦点を当てて紹介するものである。具体的には、戦前の選手として張星賢、林月雲、カサウブラウ、ラケナモを中心に検討を行いつつ、楊伝広、呉阿民、紀政といった戦後の選手についても紹介した。戦後の選手は東京大会前後の大会においてメダリストとなることができたが、一方で戦前の選手はその機会に恵まれず、そのことは後にそれらの選手が大衆の記憶から忘却されることを余儀なくした。だが、本稿ではそうした忘却された選手

<sup>1</sup> Taiwanese Athletes in the 1940 and 1964 “Tokyo Olympics”

<sup>2</sup> Sugano Atsushi, Meio University

に光を当てることで、とりわけ戦前の「高砂族」選手に代表されるような、日本統治下ですでに台湾原住民陸上のさきがけとしての存在がいたことも明らかにした。二つの〈東京オリンピック〉のなかの台湾人選手の検討は、1945年を境に日本と中華民国に分断されがちであった台湾の記憶をつなげる点においても大きな意義を有するものであった。

Key Word: Tokyo Olympics, Track and Field, Taiwanese Athletes, indigenous athletes

キーワード：東京オリンピック、陸上競技、台湾人選手、「高砂族」選手

## はじめに

本稿は、1940年と1964年の二つの〈東京オリンピック〉における台湾人選手<sup>1)</sup>について検討するものである<sup>2)</sup>。スポーツを国民国家やナショナリズムとの関係性などにおいて、人文・社会科学の議論を基盤に据えて再検討しようとする研究のなかでも<sup>3)</sup>、近年では帝国期のスポーツに関して、歴史学やスポーツ人類学などの観点からきわめて本格的な研究が多く世に問われるようになってきている<sup>4)</sup>。2020年の東京オリンピックを迎えるにあたり、とりわけ過去の大会への関心が再び高まっているといえるが、関連する先行研究については、実現しなかった1940年の幻の東京大会に関する着目が著しい<sup>5)</sup>。

1940年当時、日本は植民地帝国であった。そのため、いわゆる「外地」(台湾、朝鮮半島、満州、南洋群島等)に居住する、もしくはそれらの地域出身の選手が日本代表として活躍していた。旧外地の選手については、朝鮮人選手に関する研究蓄積を比較的多く見ることができる<sup>6)</sup>。だが、そうした朝鮮人選手に対する関心の高さの一方、「本島人」(漢族)や「高砂族」(原住民)<sup>7)</sup>といった日本統治下の台湾人選手とオリンピックについて検討した日本語による研究は見当たらない。

他方、2008年の北京オリンピック開催を一つの契機として、台湾側でもオリンピックと台湾をめぐる歴史的回顧が顕著となり、日本統治期台湾人選手への着目は以前にも増して高まってきている。台湾人選手にかかわる研究の代表的な成果と

しては、台湾身体文化学会による『台湾百年体育人物誌』シリーズの刊行があり<sup>8)</sup>、これらにおいても、台湾人として歴史上初めてオリンピック代表選手に選出された張星賢<sup>9)</sup>を始めとして、近代オリンピックとの関わりの中かでその存在が確認できる台湾人選手はある程度掘り起こされてきた。しかしながら、そのような再発見／再記憶されるようになった台湾人選手以外にも、そこにはやはり見過ごされてきた選手の存在もあった。

ちなみに、台湾は1945年に日本の統治を離れて中華民国の一省となったことから——1964年に開催された東京オリンピックには、「台湾」の名称で参加することになったとはいえ<sup>10)</sup>——1970年代までは国連の議席を有する中華民国を代表する身分で出場を果たしていた。だが結局、1964年の東京大会ではメダルに輝いた選手が一人として現れなかったため、同大会における台湾人選手の存在も、後述する楊伝広を除けば、大衆的に記憶されるほどの強い印象を残すことがなかったといえよう。

それでは、そのような台湾人選手にはいかなる人物がいたのであろうか。また、なぜそれらの選手は忘却されることになったのであろうか。ちなみに、日本統治下台湾で台湾人選手が活躍したのは主に陸上競技であったことから<sup>11)</sup>、本稿でとりあげる選手についても陸上競技に限定して検討を進める。よって、上記のような問題意識から、本稿では未実現となった1940年を中心に、戦後に実現した1964年の大会を加えることで、二つの〈東京オリンピック〉に確認できる台湾人選手

に光を当てて紹介してみたい。

## 1. 台湾人初の代表選手・張星賢—ロス大会 (1932年)・ベルリン大会(1936年)

日本が初めてオリンピックに代表選手を派遣したのは1912年の第5回ストックホルム大会であった。派遣されたのはわずか2名であり、金栗四三、三島弥彦が日本人選手初のオリンピック出場選手となった。そこから20年後、近代オリンピックに初めて出場した台湾人選手が張星賢(1910-1989年)であったが、彼は第10回ロサンゼルス大会(1932年)と第11回ベルリン大会(1936年)の双方に日本代表として出場を果たした。1932年のロス大会には、男子26人、女子9人の日本代表選手が送られたが<sup>12)</sup>、張星賢はその中で唯一の、そして初めての台湾人オリンピックであった<sup>13)</sup>。

張星賢は1910年に台中市楠町(現：台中市龍井区)に生まれた。台中公学校に通っていた際に陸上競技に親しんだとされ、4年生の時に一家は広東省汕頭に移り、台湾総督府が設置した日本人学校である東瀛学校に通った。2年半後に彼は台中州立台中職業学校に通うこととなったが、この時期に内地人教員による指導を受けたことで、陸上競技で頭角を現すこととなる。1928年の建功神社奉納陸上競技大会(以下、建功神社競技会)において初優勝を果たすと、数々の大会で記録を出し、ついには台湾代表として明治神宮体育大会に出場するまでとなった<sup>14)</sup>。

張星賢は1930年に台中州立台中職業学校を卒業、その半年後に台湾総督府交通局鉄道部(以下、鉄道部)台北工場の倉庫管理員として就職する。鉄道部はスポーツに力を入れていたことから就職を決めたものの、それは高い身体能力を有する彼を満足させられる環境ではなかった。そうしたなか、張は早稲田大学に進学した台湾人の先輩(ラグビー日本代表となった柯子彰など)から、早稲田に進学して競技を深めることを勧められる<sup>15)</sup>。

彼は1931年に早稲田大学商学部に入学し、1934年に卒業するまでの間に日本学生陸上の最強チームであった早稲田大学競走部に所属して数々の種目で日本記録を打ち立て、代表予選会でも十分な成績をあげたことで、台湾人初のオリンピック選手として選出されるにいたったのであった。

初出場となったロス大会で、張星賢は2種目(400メートル走、400メートルハードル)に出場した。だが、結果は予選落ちであった<sup>16)</sup>。台湾人選手としてオリンピック初出場となった張星賢であったが、同大会の陸上競技では、内地出身者として南部忠平が三段跳で金メダル、西田修平が棒高跳で銀メダルに輝いたものの、外地出身の選手がその栄誉を手にするとはなかった。

ロス大会後、張星賢は日本の傀儡国家として建国されて間もない「満州国」に赴き、1935年に南満州鉄道株式会社(満鉄)に就職する。そこで彼は満州チーム代表として引き続き陸上界で活躍したが、その結果、1936年のベルリン大会でも再び日本代表に選ばれることとなる<sup>17)</sup>。男子40人、女子6人の日本代表選手が送られたが、やはり台湾人選手の参加は張星賢ただ1人であった<sup>18)</sup>。

張星賢は2度目のオリンピック代表として期待を背負ってベルリン大会に参加した。出場種目は1,600メートルリレーであったが、結果はあえなく予選落ちであった。前回同様、長旅による疲労なども重なり、2度目の挑戦を試みるも、栄光を手にするとはなかった。このベルリン大会では、外地出身者としてだけでなく、アジア人選手として朝鮮出身の孫基禎がマラソンで金メダルを、同じく朝鮮出身の南昇龍が銅メダルを獲得するという快挙を達成し、大きな注目を集めることとなった。一方、張は同じ外地出身者として、同様の栄誉を自分のものにすることができなかった。

しかしながら、張星賢はこの悔しさをバネに、満州の地で陸上を続けた。その甲斐あって、翌年の1937年には、十種競技の第一候補として東京オリンピック候補選手に選出されたのだ<sup>19)</sup>。だが、その東京大会も、1938年7月中旬には返

上されてしまうこととなる。直後である同月下旬に満州国で開催された日本と同国の交驛試合<sup>20)</sup>では、「日本側を苦しめた」選手の1人として張の名前が陸上競技史にも記録されているが<sup>21)</sup>、東京大会を代替するはずであったヘルシンキ大会も1940年に中止の憂き目にあったことは、彼を深く失望させたはずであろう。

張星賢は1943年に満鉄と同じく日本の国策会社である華北交通株式会社に職場を変え、北京に移り住む。1945年に日本が敗戦すると、彼は1946年に北平（北京）から台湾に戻り、台湾省立台中師範学校に就職する。帰台後は、台湾省体育会の創設（1946年）、台湾省体育会田徑協会の創設（1946年、田徑＝陸上競技）などに関わり、1948年5月に上海で開催された第7回中華民国全国運動会に台湾省代表選手として出場後、同年に選手を引退した。39歳であった。

張星賢は1947年から退職まで台湾省合作金庫に勤務したが、1989年3月に79歳で他界した。もし1940年に東京オリンピックが開催されていたとしたら、張星賢はオリンピックに3度出場し

た台湾人選手として、その名は陸上競技史により深く刻まれることとなっていたに違いない。

## 2. 幻の東京オリンピック（1940年）と台湾女子陸上の先駆者・林月雲

張星賢は台湾人として初の、そして連続2回のオリンピック出場を果たした選手であったが、張と同じく1937年に3年後の東京大会候補選手として選出されていた台湾人には、後述する女子選手の林月雲（短距離）、黄瑞雀（投擲）がいた<sup>22)</sup>。当初はこの3名の台湾人選手が東京大会候補選手であったことが確認できるが、それらはいくまで1937年時点における候補選手であり、成績によって新たな選手が加わる可能性も大いにあった。それでは、1940年に東京オリンピックが開催されようとしていた頃には、そうした候補選手に比肩する実力を有する台湾人選手がどれほどいたのであろうか。

ちなみに、日本陸上競技連盟の調べによる「日本陸上競技界二十傑」をみてみると、1937年度

表：1937-1940年度の「日本陸上競技界二十傑」にみる台湾人選手

※太字は十傑以内の選手。学＝学生、教＝教員。

### 1937年度（男：9名、女：2名）

	種目	記録	順位		所属	注記
男子	400メートル	50秒6	6	王象	台中	
	同上	50秒8	7	張星賢	閩東州	
	同上	51秒2	13	林丙丁	台中（教）	
	800メートル	2分0秒7	9	王象	台中	※9位タイ2名
	同上	2分0秒7	9	林和引	早大（学）	
	1,500メートル	4分13秒6	18	林和引	早大（学）	
	5,000メートル	16分5秒8	20	ラケナモ	花蓮港	
	走高跳	1m85	13	董錦地	高雄（学）	※13位タイ14名
	走幅跳	7m11	15	張立三郎	台中	
	三段跳	14m81	11	張立三郎	台中	
	棒高跳	3m80	13	張立三郎	台中	※13位タイ4名
	砲丸投	12m69	10	兵明田	早大（学）	
	五種競技	2,107点	16	廖漢水	高雄（教）	
	十種競技	6,050点	3	張星賢	閩東州	
女子	100メートル	12秒5	2	林月雲	台中（教）	
	走幅跳	5m39	2	林月雲	台中（教）	
	砲丸投	9m93	5	黄瑞雀	高雄（学）	
	円盤投	26m94	15	黄瑞雀	高雄（学）	
	槍投	29m24	12	黄瑞雀	高雄（学）	

1938年度（男：6名，女：4名）

	種目	記録	順位		所属	注記
男子	100メートル	10秒6	4	張啓震	台中	※4位タイ3名
	200メートル	21秒9	3	張啓震	台中	
	5,000メートル	16分7秒4	19	ラケナモ	花蓮港	
	10,000メートル	33分51秒6	14	ラケナモ	花蓮港	
	走高跳	1m80	18	董錦地	高雄（教）	※18位タイ25名
	同上	1m80	18	張正太郎	台南	同上
	三段跳	14m29	19	張立三郎	台中	
	棒高跳	3m85	10	張立三郎	台中	
	砲丸投	11m96	20	兵明田	高雄	
	十種競技	5,004点	6	張立三郎	台中	
女子	100メートル	13秒2	10	林月雲	台北（教）	※10位タイ5名
	80メートルハードル	13秒5	4	林月雲	台北（教）	
	走幅跳	5m21	5	林月雲	台北（教）	
	同上	4m72	16	王式緞	高雄（教）	※16位タイ2名
	砲丸投	10m75	4	黄瑞雀	高雄（教）	
	円盤投	26m49	15	黄瑞雀	高雄（教）	
	同上	26m14	17	巖曰	高雄	
	槍投	32m88	6	黄瑞雀	高雄（教）	

1939年度（男：5名，女：3名）

	種目	記録	順位		所属	注記
男子	100メートル	10秒8	8	張啓震	台中	※8位タイ5名
	400メートル	51秒2	8	王象	早大	
	800メートル	2分0秒5	5	王象	早大	
	10,000メートル	34分40秒4	17	カサウブラウ	花蓮港	
	円盤投	37m24	18	呉振武	台南師範(学)	
	砲丸投	12m23	12	兵明田	高雄	
女子	200メートル	28秒9	20	周来福	高雄（教）	
	砲丸投	10m27	7	黄瑞雀	高雄（教）	
	円盤投	26m66	14	黄瑞雀	高雄（教）	
	槍投	32m26	7	黄瑞雀	高雄（教）	
	槍投	26m04	19	鄭香閩	台南二女(学)	

1940年度（男：5名，女：1名）

	種目	記録	順位		所属	注記
男子	400メートル	52秒3	19	王象	早大(学)	※19位タイ2名
	10,000メートル	33分8秒2	8	ラケナモ	花蓮港	
	走幅跳	7m26	6	張正太郎	台南（教）	
	砲丸投	12m13	11	呉振武	台南師範(学)	
	円盤投	36m72	15	呉振武	台南師範(学)	
	槍投	56m74	7	蘇枝模	台南二中(学)	
女子	100メートル	13秒1	8	周来福	高雄（教）	※8位タイ5名

出所：次の資料をもとに筆者作成。①朝日新聞社運動部編『運動年鑑 昭和14年度 付録』朝日新聞社，1939年。②朝日新聞社運動部編『運動年鑑 昭和15年度 付録』朝日新聞社，1940年。③『陸上日本』第84号，1938年1月，126-144頁。『陸上日本』第94号，1939年1月，61-71頁。『陸上日本』第122号，1941年3月，48-83頁。朝日新聞社体力部編『運動年鑑 昭和16年度 付録』朝日新聞社，1941年。

①は「十傑」のみ，②は一部「二十傑」まで記載あり，③は全種目で「二十傑」まで記載あり。1938年と1939年の成績は公認競技場で達成された個人競技の記録のみ。記録には後日訂正や修正が加えられている場合があるため，発行日が新しいものを優先して参照した。

から1940年度の4年間のランキングに以下の台湾人選手の名前を見ることができる。

前記の表で各年の十傑以内に入った人物（太字で強調）に限ってみると、王象、林和引、兵明田<sup>23)</sup>、張星賢、張啓震<sup>24)</sup>、張立三郎<sup>25)</sup>、林月雲、黄瑞雀<sup>26)</sup>、カサウブラウ、ラケナモ、張正太郎といった名前が確認できる。張星賢については先述した通りであるが、史料不足のため詳細が不明な者も少なくない<sup>27)</sup>。原住民選手であるカサウブラウとラケナモについては後述するので、ここでは近年特に注目を集めるようになった女性選手の林月雲を紹介したい<sup>28)</sup>。

林月雲は1915年に彰化郡和美庄柑子井（現：彰化県和美鎮）に生まれた。父親は彰化建築組合理事も務めた地元の名士で、多角的な事業を行い、裕福な家庭に育った。彰化公学校、彰化高等女学校在籍中に運動面での才能を見せ始め、台湾を代表する女子選手として知られるようになる。

その彼女が広く知られることとなる最初の契機が1931年11月に開催された第6回明治神宮体育大会であった。同大会で林月雲は100メートル走および三段跳の2種目に出場したが、林は三段跳で2位（10メートル96センチ、台湾新記録）につけた。優勝こそ逃したものの、当時の日本記録（11メートル16センチ）にも迫るその成績は、彼女に対する注目と期待を集めることとなった。

同大会は林月雲にとって大きな契機となった。彼女は彰化高等女学校を卒業後に内地に進学し、日本女子体育専門学校（現：日本女子体育大学）で陸上競技に関する専門的な学びを深めることとなる。ところで、当時の女子陸上競技の発展に際しては、人見絹枝の存在を抜きにして語ることはできない。女子競技がオリンピックに加えられるようになったのは1928年の第9回アムステルダム大会からであったが<sup>29)</sup>、初出場となった人見絹枝は800メートル走で銀メダルを獲得し、国中を大きく湧かせた。その人見が学んだのが日本女子体育専門学校であり、彼女は1925年に台湾に招聘され、女子体育講習会を開いて陸上競技を広

める活動を行っていた。林月雲の台頭についても、そうした人見の存在と活躍が林に何らかの影響を与えていた可能性も推察されている<sup>30)</sup>。

なお、先述のように、張星賢は台湾人初のオリンピック代表選手として1932年のロス大会に出場したが、本来は林月雲にも同様の期待が寄せられていた。だが、林が得意としていた三段跳は女子の大会競技種目ではなく、100メートル走での出場権を争う挑戦となった。林は1932年4月に台湾で開催された建功神社競技会兼オリンピック地方予選会において100メートル走で12秒9の台湾記録をたたき出していたことから、短距離走でのオリンピック出場の可能性が見込まれていたのである。しかしながら、望みをかけていた同種目にはすでに多くの強敵がひしめき合っており、結果として林は、1932年5月に開催されたオリンピック予選会では決勝進出までいかなかった。

ロス大会への出場はかなわなかったものの、1933年11月に開催された第7回明治神宮体育大会において、彼女は三段跳で競技人生初の優勝を手にすることとなる。2年後の1935年11月に開催された第8回明治神宮体育大会では、100メートル走2位と80メートルハードルで2位につけた<sup>31)</sup>。これらの優秀な成績を収めたことにより、同大会終了後、林月雲は翌年1936年に開催されるベルリン大会第一候補として選手20名の1人に選出されることとなる。だが、彼女は不幸にも、過度な練習が原因で予選会1週間前に急性肺炎を患ってしまう。この不遇の事態により、林はあと一歩のところまでベルリン大会の出場権を逃してしまったのである<sup>32)</sup>。

林月雲は1936年ごろに日本から台湾に戻り、体育教員として勤務した<sup>33)</sup>。その間、台湾で開催された1937年9月の第18回全台湾陸上競技選手権大会（以下、全島陸上大会）兼第9回明治神宮台湾予選会に出場し、自己の台湾記録を塗り替えて優勝を果たしていた。2ヵ月後の11月に開催された第9回明治神宮体育大会では、100メー

トル走で4位、走幅跳で2位となった。以上の成績を受けて、彼女はついに念願かなって1940年に控えた東京オリンピックの候補選手として選出されるにいたった。今度こそ大会出場への期待がかけられたものの、1937年に勃発した日中戦争の影響を受け、東京大会は翌年夏に返上されることとなり、彼女がオリンピックに出場する可能性は絶たれることとなった。

1945年に30歳となった林月雲は、結婚を機に退職し、厦門ラジオ局の局長の職にあった夫・葉肇卿と同居するため、福建省の厦門のコロンス島に転居した。だが、同年の8月に日本は敗戦する。その4年後である1949年に台湾に戻った林は、1955年に台湾省立彰化商業職業学校（現：国立彰化商業職業学校）に採用され、1980年までの25年間にわたり奉職した<sup>34)</sup>。

林月雲がもし東京オリンピックに出場できていたならば、かなりの活躍が見込まれていたとされているが、その機会も彼女には巡ってくることはなく、台湾メディアから「速度女王」等の異名を与えられていた彼女も、1992年6月に逝去している<sup>35)</sup>。

### 3. 台湾競技界の問題点—平沢平三による指摘と批判

ところで、一般的に日本統治下台湾の陸上競技界は、日本はもとより、朝鮮半島と比較しても競争的であるとは見られていなかった。こうした台湾における運動界の問題点は、はたしてどのようなところにあると考えられていたのであろうか。

この点について、1938年4月の日本陸上競技連盟が発行する雑誌である『陸上日本』に掲載された「台湾の競技雑感」と題した文章において、台北高等学校教諭の平沢平三<sup>36)</sup>は、「台湾にくると色々変った点が眼について、あゝしたらかうしたらと考へずには居られなくなりましたので、其の感じたままを述べて、競技界にたづさわつて居られる方々の御一考を煩はしたいと思ひます」

と前置きしたうえで、台湾における競技界の問題点を分析していた<sup>37)</sup>。少し長いが、重要な指摘であることからここでは要点をまとめて紹介したい。

台湾競技界の振はない原因の多くは余り穏やかすぎる。即ち余りにのんびりしすぎて居る点にありはしないだろうかと思ひます。（略）

先づ競技会とは少々かけはなれるかも知れませんが振はない原因をあげて見たいのは競技の中心をなす学生層、即ち学生数が少ないのと学校が余りに散在しすぎて居る点にあらうと思ひます。これは何んと言つても内地のやうに殆んど全部を一つ処に集めて居るところに及ばない事は明らかであります。然し学生の少いことや、学校の散在してゐるだけでは不振の原因とはなり得ないと思ひます。台湾にも高専大会があり、インターミドル、マッチがあり、選手権大会があり、奉納競技会があつて、その技を進めるには十分によい機会はいくらでも与へられて居るのであります。どうしたものか、<sup>38)</sup>

このように問題提起を述べたうえで、続けて平沢はその問題点の原因について次のように喝破していた。

さういふものに対して真剣に努力して居る様子が見えません。対抗意識のとほしい事は学校の散在してゐるためか内地より余り離れすぎてゐるためか、それとも暑さが余りに強すぎるせいなのか、兎角学校と言ふものが単位である以上其の練習にあたつても一緒になつて練習をする処に学校としての強味も出来、又一種の学校精神と云ふものによつて他の学校と異つた力を持つ事が出来ると思ひます。内地はその学校学校によつてそれぞれ異つた気風に育つた強味を持つてゐるやうですが、台湾ではさうしたものが見当らないのであります。

これもその起因がグラウンドの少いためか、不

便の為めかには外ならないでせうが学生選手自身離れ\の練習をやつて居ることによることも大きな原因だらうと思ひます。(略)それ\競技に志して練習を続けて居る様に見えるけれど、どうも私の目にうつるものは本当に其等の人々が強くなろうとして努力して居るのか、どうかを疑はしめるものが多いやうであります。<sup>39)</sup>

まず、台湾においては、「真剣に努力して居る様子」が見られないばかりか、「対抗意識のとぼしい」点が指摘されていた。練習できるグラウンドが少ない不便さもあるが、競争意識を持ちながら強くなろうとする意欲が薄いとし、続いて、平沢は次のように論ずるのであった。

台湾では練習と云ふ観念を根本から変へない限り、今の台湾が強くなつて行かうとは思はれませんが。現在の台湾の状態は強いものと弱いものとが同一の練習過程をたどらうとしてゐるやうに見受けられます。弱いものが強いものの練習そのままを見習つてはならないと思ひます。強くならんがためには強者の何倍かの練習と努力とを要することを忘れてはならないのにそれが欠けてゐます。

このように述べたうえで、平沢は、台湾では選手が単独で練習しすぎていることから、学校を単位としたクラブを結成して対抗戦で競い合うことで強くなるよう努めるべきだと説いていた<sup>40)</sup>。

平沢は、「唯行き当たりばつたりの方法を用いて勝たうと考へる事は余りに無謀と云はなくてはなりません」と述べていた<sup>41)</sup>。その他、選手個人の問題以外にも、台湾では慢性的に審判員不足が見受けられるにもかかわらず、審判の欠席が甚だしいことも問題として指摘していた<sup>42)</sup>。

平沢平三によるこれらの指摘と批判は、台湾競技界の問題点を鋭く突くものであった。しかしながら、この指摘が台湾内部にのみ流通する雑誌でなされたものではなく、日本陸上競技連盟によって全国に向けて刊行される雑誌に掲載されたイン

パクトと影響には甚大なるものがあつたはずであろう。また、この平沢の指摘と同様に、台湾にコーチとして訪れていた村社講平も「たゞ台湾競技界は指導者に乏しく、良材はあつても之を発見し、指導する方法と競技会が尠いので、刺激が尠く、さながら宝玉を死蔵するかの如き感を受けた」、<sup>43)</sup>「台湾競技界が一日も早く、多くの指導者と競技会を持つて、東京オリンピックにも日本代表へ多くの選手を加へる事の出来る事を希望して止まない」と台湾競技界の問題点を述べていた<sup>43)</sup>。平沢と同じく、日本を代表する陸上選手である村社によつてもこのような印象が語られていたのであつたが、ここで重要なのは、台湾に良い人材がないのではなく、そうした人材を発掘して潜在力を引き出し、高めることのできていない指導者側と、満足のいく機会と環境を提供できていない行政側の不足を説いた点であつたといえよう。

そもそも、台湾の競技界は、1935年の時点ですでに朝鮮との比較において、「朝鮮スポーツ界は一步先に新たな段階に進んで半島人がその戦闘力の中心となつてゐる、台湾はどうであらう?」、「人口の大多数を占めてゐる本島人のスポーツへの進出はいまだ端緒についたばかりである」、「殆ど少数内地人によつて、輝ける功績を維持するに汲々たる現状ではあるまいか?」<sup>44)</sup>と評されていた<sup>44)</sup>。そうしたなか、東京オリンピックをチャンスと捉えて中等学校での陸上競技の推進を講じるべきとの意見が新聞でも投書されるなど、東京大会という「千載一遇の好機」に乗じて台湾の競技水準を高める必要性も叫ばれるようになっていた<sup>45)</sup>。

学校における強化策が実際どれほど講じられたのかは定かではないものの、翌年の東京大会に備えるべく、1937年には台湾体育協会に対する補助金の大幅増額が認められた<sup>46)</sup>。その同協会が実施した選手強化策には、一例として、1937年7月に関西大学陸上部が来台して全台湾代表との対抗試合を行った関西大学対全台湾対抗陸上競技大会(以下、関大台湾陸上大会)や<sup>47)</sup>、1938年1



月に村社・南部の両オリンピック出場経験者を招へいして開催された指導競技会などがあった（詳細は後述）。また、1938年6月に内地への遠征「陸上軍」を選抜し、7月に「内地遠征」として甲子園と名古屋で競技するなどしていた<sup>48)</sup>。そこではやはり、東京大会を控え、同大会を一大契機として台湾陸上選手団の強化を総力あげて図ろうとしていた様子がかがえたのであった。

特記すべきは、東京大会のために講じられた戦略として、台湾体育協会が「マラソン、長距離を有望視」し<sup>49)</sup>、次に紹介するカサウブラウやラケナモのような、同種目で活躍できる原住民選手を特別に養成するという新たな方向性が明確化されていったことであった。

#### 4. 原住民陸上選手のさきがけ—カサウブラウとラケナモ

原住民陸上選手<sup>50)</sup>の発掘と強化は、1940年の東京オリンピックに向けて打ち出された新たな戦略であった。陸上競技で原住民選手の名前は数名確認できるが、ここではカサウブラウ（1906-1994年）とラケナモ（1908-1997年）という2名の花蓮のアミ族選手についてみていきたい<sup>51)</sup>。両選手については台湾側の研究においても詳細が明らかとされていなかった。だが、日本統治下台湾の陸上界の「一流」選手と評されていた<sup>52)</sup>彼らについては、新聞等のメディア報道から以下のような記事を確認することができる。

まずはカサウブラウであるが、彼に関しては1935年の第16回全島陸上大会で5,000メートル走2位となっていたほか<sup>53)</sup>、1937年9月には台北で開催された「台湾初のマラソン大会<sup>54)</sup>」で優勝するなど、多くの注目を集めるようになっていた。先述のように、1937年春には東京大会に向けて「マラソン、長距離を有望視」する方針とその強化が台湾体育協会によって示されていたが、カサウブラウは同協会がテコ入れしようとしていたマラソンの台湾における筆頭選手であっ

た。1937年7月の関大台湾陸上大会では、10,000メートル走でラケナモに次いで2位であったが<sup>55)</sup>、とりわけ大きく報道されたのは、その4カ月後の11月に開催された第9回明治神宮体育大会の陸上競技での活躍であった。

同大会にカサウブラウはマラソンで出場したが、彼の記録は2時間52分25秒であった。これは、全体では第10位の成績であったとはいえ、台湾内の記録としては堂々の「台湾新記録」であった<sup>56)</sup>。カサウブラウの走りについては、マラソンで日本人初のオリンピック代表選手となった金栗四三をして「将来有望」と言わしめたことが報道されていたことから<sup>57)</sup>、彼の持つ潜在力が高い評価を得ていたことがわかる。また、彼の人間性と潜在力についても、例えば、台湾体育協会幹事の鈴木実は、「カサウブラウ君といふ男は人間としても非常に素質を持つてゐましてね、ラケナモ君よりも人間がはつきりしてゐるし、線も太い」ときわめて高く評価していた<sup>58)</sup>。

このように、カサウブラウは後述するラケナモとの比較でも、コーチ側から一目置かれていた。その期待通り、1938年9月には台湾新記録を出し<sup>59)</sup>、1939年の全島陸上大会では10,000メートル走とマラソンで1位という成績をあげていた<sup>60)</sup>。台湾で開催された大会では優勝を果たすなど、優秀な成績を残し、1940年にはフィリピンへの遠征にも参加していたものの<sup>61)</sup>、以降においてカサウブラウの競技履歴は明らかではない。

他方のラケナモであるが、彼の名が『台湾日日新報』に出てくるのはカサウブラウよりも早く、1932年8月のことである。花蓮港陸上競技大会において5,000メートル走で1着となり新記録を出したことが大きく報道され、「昨年台北に於いて行はれた長距離に花蓮港が独占した時に台湾のフィンランドの綽名を与へられたがこの名を辱めなかつたわけである」と評されていた<sup>62)</sup>。すでにラケナモは前年の大会からその存在が確認できていたようであるが、ここから彼は最もその名を報道される原住民選手となっていくのである。

その2カ月後の10月には、第13回全島陸上大会の開幕を伝える記事のなかで、「長距離界の二雄」として日本人選手とともにラケナモが紹介されていた<sup>63)</sup>。また、ラケナモは1934年の第15回大会においても、その快走が「一本槍」と称されていた<sup>64)</sup>。何より、重要と思われるのは1935年の第8回明治神宮体育大会陸上競技に「高砂族最初の参加者」として出場を果たしたことであり、これは新聞報道においても「特記すべき」点と述べられていた<sup>65)</sup>。

その後、ラケナモは年々タイムを縮め、毎年のように台湾新記録を打ち立てていくこととなる。その5,000メートル走の記録としては、1935年の第16回全島陸上大会で16分8秒8<sup>66)</sup>、1936年の第17回大会で15分46秒6<sup>67)</sup>と次々と記録を塗り替えていった。このラケナモの快進撃に対しては、1936年の大会結果を報じる新聞報道でも、「“台湾の村社”現る 高砂族青年の活躍 五千と一万メートルに新記録！ 東京大会出場を期待」との大見出しによりトップ扱いで報じられ、「大会の人気を一人ですらつてゐる」とまで称されていたほどである<sup>68)</sup>。そしてついに、1938年4月には15分35秒8にその記録を更新し、オリンピックに向けて大きな期待と注目を集めていった<sup>69)</sup>。

こうしたラケナモの活躍には、総督府側も注視していた。1937年1月20日には、台湾総督府総務長官で台湾体育協会名誉会長を務めていた森岡二郎<sup>70)</sup>が、「高砂族の青年は長距離も強いさうだ、東京オリンピックもあるし大いに奨励する」と発言していた<sup>71)</sup>。1937年3月14日には東京オリンピックに向けた第一次台湾代表候補が台湾体育協会陸上競技部によって選出されたが、長距離選手の筆頭にあげられていたのがラケナモであった<sup>72)</sup>。そこでは「マラソン及び長距離競走はオリムピックに対し台湾としては有望種目と思料せられるに付き昭和十二年度より直に有力選手の詮衡、強化に関して特別に意を用ふる」とされ、選手への強化対策が組まれるうえで、マラソンと長距離がオリンピックで特に期待が持てそうであること、す

なわちラケナモが有望視されていることが明記されていた<sup>73)</sup>。

実は、その4日前の報道では、「オリンピック代表 高砂族から出せ／長官のお声懸りで“南島の村社”養成／花蓮港庁下で初競走会 心臓の強い好記録」との大きな見出しでトップ記事として掲げられ、その左にはランニング姿の笑顔のラケナモの写真が「昨秋全台湾陸上競技大会で一万米決勝に台湾新記録を作った高砂族のホープ・ラケナモ君」とのキャプション付きで掲載されていた<sup>74)</sup>。この破格の報道と扱いからも、ラケナモにかけられた期待がいかに大きかったかがうかがえよう。

東京オリンピックに向け、1937年5月には地元の花蓮で「高砂族選手後援会」が組織される一方<sup>75)</sup>、同年夏には総工費8,100円をかけて花蓮の花岡山グラウンドに野球場と400メートルトラックを建設する拡張工事が着工された<sup>76)</sup>。新聞には、「東京大会のホープ 高砂族の運動場 花蓮港花岡山に」との大きな見出しで拡張工事が報道され、「これでオリンピックに活躍を予想されてゐる長距離のラケナモ君以下高砂族選手は思ふ存分の練習が出来るわけだ」と説明されていた<sup>77)</sup>。

また、ラケナモの名前は、遠く南米の日系人社会にまで届いていた<sup>78)</sup>。その際に大きな注目を集めたのが、1938年1月19日から日本を代表する陸上選手である村社講平（ベルリン大会マラソン4位入賞）と南部忠平（ロサンゼルス大会三段跳び金メダル・走り幅跳び銅メダル）が来台し、台湾全島で行った競技指導である。

村社と南部の2名のオリンピックは、台湾体育協会の招聘を受け、台湾側の選手にコーチを行うために3週間の予定で来台した。特筆すべきは、台湾に到着した際、「高砂族」選手への強い期待を村社が以下のように述べていたことである。

高砂族のマラソンは有望だと聞いたので、昨年の明治神宮大会には是非みようと思つてゐましたところ、都合があつて残念ながら見逃してしま

ひました…いよ／＼オリンピック東京大会も近づいて来ましたが、その節は大いに活躍してスポーツ日本の名を高めていたゞきたいと思ひます<sup>79)</sup>。

この2名の国民的スポーツ選手の來台指導は台湾在住選手の競技意欲を鼓舞することとなったはずであり、それは、両者の滞在中にラケナモが台湾新記録(1,500メートル走, 4分12秒2)を出し、大々的に報道されていたことにもみてとれよう<sup>80)</sup>。

内地に戻った村社は、『陸上日本』に「台湾コーチ巡り」と題した文章を寄せたが、そのなかでラケナモを以下のように絶賛していた。(下線は引用者)

南部さんが短距離、フキルド全部をコーチし、私は唯、中長距離のみをコーチして廻つたのであるが長距離ではアミ族が先天的に優秀な素質を持ち、台湾の競技界は之等のアミ族によつて完全に牛耳られてゐると言つて良い位である。

其の中でも特に有望だと思つたのは、先年神宮競技の五千米に出場したラケナモ選手である。先年見た時とは見違へる程に身体も出来、ストライドも開く様になつて居て最初、私と練習した際、一気に離してやらうと思つて相当に奮張つて見たが、いつか離なれず執拗に喰ひついて来るので、驚嘆したものだつた。(略)

…千五百米を殆ど独走の様に走り、四分十二秒のタイムを出したが、彼の底力から見て内地の千五百米選手は相当戒心を要するものと思つてゐる。(略)

アミ族は一般にフアイトも強いし、粘着性はあるし、体軀もガツチリして居るので、長距離には持つて来いである。<sup>81)</sup>

とりわけラケナモに対する注目は大きいものがあった。『陸上日本』誌上においても、「異色台湾軍の双壁」と題したグラビア写真で、短距離の張啓震とラケナモの2人が「張啓震選手とラケナモ選手は実力に於て日本の第一線に伍する選手」と

の紹介文とともに紹介されていた。グラウンドのポールに寄りかかりながらたたくラケナモの大きなスナップはひときわ目を引くものであり、まさに「日本の第一線」を走る台湾人選手に向けられた注目度を示すかのようであった<sup>82)</sup>。

ところで、1938年春には、東京大会にそなえて鉄道部が観光団体を募ると同時に「台湾観光協会」設立準備を進めていることが報道されていたように<sup>83)</sup>、東京大会の開催の実現を見込んだ動きが台湾でも高まっていた。だが、戦時色が強まり、「非常時」の言葉が常用されていく状況下において、結局は同年の7月15日に東京大会の返上がついに閣議で正式決定され<sup>84)</sup>、1940年の東京大会は実現せずに終わることとなった。

実際、その頃は台湾におけるスポーツにも、長期化の様相をみせる日中戦争の影響が暗い影を落とすようになっていた。1938年4月から5月に開催された建功神社競技会には「手榴弾投競争」を始めとする「陸上武装競技」も盛り込まれることとなった<sup>85)</sup>。翌年の1939年5月には主にゴム製のスポーツ用品も国策である配給統制にあわせて切符制の割り当てに変わった<sup>86)</sup>。

1940年9月に開催された、台湾総督府主催による紀元2600年奉納台湾体育大会の記録をみると、5,000メートル走および10,000メートル走の双方でラケナモの名前が残されている<sup>87)</sup>。また、同年10月から11月に開催された第11回明治神宮国民体育大会においても、5,000メートル走の予選で第1組5着に名前を残している<sup>88)</sup>。

その直後である1940年11月27日からの10日間には、宮崎神宮から畝傍榎原神宮までを走る駅伝競走があった。同大会では、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州、朝鮮・台湾、満州の8地域の出身チーム、160人の参加選手によって争われた<sup>89)</sup>。最終的に、朝鮮・台湾の外地チームが優勝したのであったが、同チームにおいてもラケナモは勝利に大きく貢献していた。

やがて、1941年には陸上雑誌も停刊となり、1943年を最後に「空白の時代が、太平洋戦争の

終るまでつき、かつての陸上日本は全く姿を消してしまつた」と評される状況となつた<sup>90)</sup>。こうした戦時下の状況において、スポーツが再び復興を遂げるには戦後を待たなければならなかつた。

従来、日本統治時代の原住民陸上選手の詳細については、台湾側の研究でも触れられることがなく、その存在が知られることはなかつたが、カサウブラウとラケナモの遺族の証言によれば、二人の“その後”は次のようなものであつた<sup>91)</sup>。カサウブラウは戦前に加藤春一はるいちの日本名を有していたが、台湾が中華民国となつた戦後は中国名の葛嘉灶を名乗ることとなつた。行政機関である衛生局や台湾銀行に勤務するなど、原住民出身としては異例の出世を果たしたが（長女の葛美芳も原住民出身の花蓮県議員として3回当選を果たす）、1994年に82歳で死去した。

カサウブラウは生前多くを語ることはなく、家族も日本統治時代の父親については「足が速かつた」程度の知識しかなかつたという<sup>92)</sup>。また、カサウブラウは自身の子に対して競技を勧めることはなかつた。ところが、父親のかつての活躍を知るはずのない三男の葛三郎は、マスターズ陸上で台湾を代表する選手にまでなり、2012年に原住民田徑協会を創設し、理事長を務めるまでになつた<sup>93)</sup>。カサウブラウの秀でた身体能力は明らかにその子女に受け継がれ、台湾におけるスポーツの発展に貢献を果たすことになつたといえよう。ただ、カサウブラウは、運動より学業を重んじるべきことを自身の子に対して常々語っていた反面、過去の競技経歴についてはほとんど周囲に伝えていなかつたという。このことは、彼が原住民として上昇志向を持ち、「立身出世」のためには運動よりも勉学を優先すべきとの姿勢を有していたからこそ、あえて進んで語らなかつたのかもしれない。

他方、ラケナモは日本統治時代には宮本勝政かつまさの日本名を有していたが、戦後は曾富勝の中国名となつていた。比較的早期に競技から身を引いてい

たと推察されるカサウブラウとは異なり、ラケナモは戦後初期の運動競技大会にも出場し、その名を残している。なかでも、1947年12月に台中で開催された第2回台湾省運動会に参加したラケナモは、1,500メートル走で銅メダル、5,000メートル走で金メダルに輝いている<sup>94)</sup>。また、翌年の1948年5月には、第二次世界大戦後初めて開催された中華民国の全国競技会である第7回中華民国全国運動会にも、ラケナモは台湾省代表として参加していた<sup>95)</sup>。戦前は「ラケナモ」、戦後は「曾富勝」の名でその名を記録に残したラケナモであつたが、1948年の時点で42歳目前であつた彼は、体力的にも若年者と競い合うにはすでに限界にきていたため、同年の全国運動会をもって現役を引退した。やはり、1940年に「もし東京オリンピックが開かれていたら、自分も出場できていたかもしれない」と、胸に秘めた無念の思いを家族に吐露したこともあつたというラケナモも<sup>96)</sup>、その後、鉄道局を定年まで勤めあげ、1997年に91歳で死去した。

台湾の原住民陸上選手については、後述するアミ族の楊伝広を始め、1945年以後に活躍した選手の存在が良く知られている。だが、その一方で、1945年以前の日本統治時代の台湾で活躍した選手については、中国語名への転換から戦前・戦後の連続性を把握することが困難だつたこともあつてか、従来ほとんど紹介されることがなかつた<sup>97)</sup>。しかしながら、カサウブラウやラケナモなど、日本統治下ですでに原住民陸上選手のさきがけとしての存在がいたことを明らかにし、記録しておくことは、1945年を境に分断され、忘却されがちな日本統治時代と戦後の台湾の記憶をつなげる点においても重要であろう。もし1940年の東京オリンピックが開催され、原住民の長距離走選手が活躍していたとしたら、戦後の楊伝広が一躍国民的英雄になつたと同様に、多くの人々の脳裏に記憶される存在となり得たのかもしれない。

## 5. 東京オリンピック（1964年）と楊伝広、呉阿民、紀政

1964年、戦前実現をみなかった東京オリンピックはついに開催された。この東京オリンピックにはどのような台湾人選手が参加していたのであろうか。東京大会前後のオリンピックにはすでにメダル獲得の快挙を成し遂げていた台湾人選手がいたことから、同大会では台湾人選手が活躍する機会が十分に存在していたといえるが、ここでは、楊伝広、呉阿民、紀政の3名を取りあげてみたい。

東京オリンピックでは本来、確実に表彰台に立つと思われた台湾人選手がいた。それが楊伝広であった。楊伝広は「アジアの鉄人」の異名を持ち、東京オリンピックの前に開催された1960年ローマオリンピックの陸上十種目では銀メダルを獲得した。これは、中華圏出身の選手としてはオリンピック史上初のメダルであり、その快挙は兩岸双方においてともに語り継がれている<sup>98)</sup>。

楊伝広は1933年に日本統治下の台東郡台東街馬蘭（現：台東県台東市馬蘭里）に生まれたアミ族であり、本来の名前を「Misun」<sup>99)</sup>と書いた。彼が12歳であった1945年に台湾は日本から中華民国の一省となるが、「楊」という姓も、日本から中国への国籍転換によって新たに付けられたものであった。彼は当初から陸上選手であったわけではなく、台東農業職業学校に進学した際に出場したのは野球の大会であった。その彼が陸上で頭角を現すことになったのは、1951年に花蓮で開催された東部軍民運動大会での走幅跳の省記録達成であった。同大会での活躍により、彼は学校卒業後に聯勤総司令部兵工学校「駱駝田径隊」に参加し、省運動会でも存在感を示すこととなり、1954年から陸上十種競技を開始させた。

1956年にオーストラリアで開催されたメルボルンオリンピックに初出場した楊であったが、結果は8位に終わった。だが、2年後の1958年に東京で開催された第3回アジア大会で、彼は日本の香月清と鈴木章介をおさえて金メダルに輝くこ

とになり、この東京大会において彼は世界で戦えるアジア人選手との評価を得ることとなった<sup>100)</sup>。アメリカUCLAへの陸上留学も果たした楊は、数々の大会で優勝し、1960年のローマオリンピックではアメリカ代表のレイファー・ジョンソンとの死闘の末、アジア人では不可能と思われていた十種競技でついに銀メダルを手にする偉業を成し遂げた。これは、1932年に中華民国がオリンピックに出場して以来、初めてもたらされたメダルであった<sup>101)</sup>。帰国後に彼は蒋介石総統夫妻に謁見し、国民的英雄となった。彼の實力は、1958年の東京アジア大会で初めて世界に認められたといえるが、6年後奇しくも再び同じ東京の地で開催されるアジア初のオリンピック大会において、楊自身が「東京オリンピックの十種競技で金メダルを獲る」と宣言していたように、彼の練習と成長の成果が発揮され、必ずや台湾にメダルをもたらすと信じられていたのであった<sup>102)</sup>。

しかしながら、大きな期待を背負って出場した1964年の東京オリンピックは、結果的に5位に終わった。金メダルの獲得を多くが確実視していたにもかかわらず<sup>103)</sup>、この意外な結果に終わってしまった原因については、新採点方式の導入に加え、当初の説明では風邪による体調不良などが原因とされた<sup>104)</sup>。だが、その後に楊自身が語った「真相」によれば、「共産党スパイによる工作」であったとされる<sup>105)</sup>。大会当時若干風邪をひいていた彼に対して、射撃の中華民国代表として同大会に参加していた馬晴山という選手が瓶状の風邪薬ドリンクを飲むよう勧めてくれたものの、そのドリンクを飲んでからというもの、全身の力が入らない状態になってしまったのだという。その馬晴山は、同大会閉会式の前日に中華人民共和国への亡命希望を表明して大陸へ渡ったことから<sup>106)</sup>、この工作は共産党による策略であったとされている。楊伝広の競技人生は、この東京大会をもって終止符が打たれた<sup>107)</sup>。

他方、楊伝広と同じく東京オリンピックに出場した選手には呉阿民がいた<sup>108)</sup>。呉阿民は1938年

に花蓮港庁鳳林郡（馬太鞍部落，現：花蓮県光復郷）に生まれ，楊と同じアミ族であった。彼も本来の名前を「Amin Lais」といった<sup>109)</sup>。1958年に台湾省立花蓮師範専科学校（現：東華大学）卒業後，母校の光復国民小学に勤務したが，十種競技を始めたのはその頃であった。十種競技を開始した理由について，花蓮県立体育場で練習する楊伝広を目にし，その時「楊伝広にできるのなら自分もできるはずだ」と思い，練習を始めたのだという<sup>110)</sup>。そのずば抜けた身体能力が中華民国体育総会の目にとまり，呉阿民は「第二の楊伝広」となるべく，台湾省立体育専科学校で専門的な訓練を受けることとなった。

楊と同じアミ族の選手として，2人は1962年のジャカルタでのアジア大会に同時出場するはずであったが，共産党による妨害で出場は果たされなかった。ようやく2人が同時に国際大会で競うことができたのが，1964年の東京オリンピックであった。だが，先述の通り，楊は不調に見舞われ，呉の方も十種競技の最初の種目である100メートル走に出場した際，右大腿部に大きな怪我を負ってしまい，棄権を余儀なくされたために，台湾勢は期待されていたメダル獲得がかなわなかった<sup>111)</sup>。

呉阿民はその後，1966年のバンコクでの第5回アジア大会で，野上征雄，山田宏臣といった日本人選手をおさえて金メダルに輝き，楊伝広の次にアジア大会の十種競技で優勝した台湾人選手となった<sup>112)</sup>。呉は，楊伝広と同時期の東京大会出場であったため，楊の影に隠れがちであった。本来は，楊の不調によって活躍の可能性もあったものの，自身の怪我によってその可能性もついでに失ってしまったのであった。

女子選手では，楊伝広，呉阿民と同じく，1964年の東京オリンピックに出場していた台湾人選手には紀政がいた<sup>113)</sup>。1944年に新竹州新竹市牛埔（現：新竹市香山区牛埔里）の農村に生まれた紀政<sup>114)</sup>は，「東洋のカモシカ」と呼ばれ，台湾の女性選手としては最も名の知られる人物となっ

た。しかしながら，アメリカでの陸上留学中に20歳で参加した東京大会では，五種競技に出場したものの，彼女の成績は22人中17位とまったく振るわなかった<sup>115)</sup>。だが，その4年後の1968年メキシコ大会女子80メートルハードルで銅メダルを獲得し，これは中華民国がオリンピックに参加して以来初の女子選手のメダルであり，1960年に楊伝広がローマ大会で手にした銀メダルに続く快挙となった<sup>116)</sup>。

現役引退後には立法委員（1981-1990年）を務めるまでの国民的英雄となり，近年では2020年の東京大会に向けた「正名」住民投票運動<sup>117)</sup>を推進した紀政であったが，彼女も，東京でのオリンピックでは榮譽に輝くことがなかった。東京大会の一つ前の1960年ローマ大会で楊伝広が銀メダルを，一つ後の1968年メキシコ大会で紀政が銀メダルを獲得したものの，前回の幻の東京オリンピック同様，結果的に1964年の東京オリンピックにおいても，全種目を通じて表彰台に立つことのできた台湾人選手は一人も出ることはなかったのである。

## むすびにかえて

以上，過去における1940年と1964年という二つの〈東京オリンピック〉と台湾人選手について，戦前の選手として，張星賢，林月雲，カサウブラウ，ラケナモの4名を，戦後の選手として，楊伝広，呉阿民，紀政の3名をとりあげて検討してきた。結局のところ，1940年の東京大会は返上され，戦後ようやく実現をみた1964年の東京大会においてもメダルに輝く台湾人選手が出ることはなかった（その後台湾人選手のメダル獲得は1984年のこと）<sup>118)</sup>。ちなみに，各時代の〈東京オリンピック〉をみると，台湾人選手は，1940年は日本，1964年は台湾，2020年はチャイニーズタイペイ（中華台北）といったように，それぞれ異なる名義での参加となる。東京大会は，東アジア地域の他国との比較においても，台湾人選手にき

わめて固有ともいえる、その変容する代表性をも示していたイベントであったといえよう。

戦前の台湾における運動競技の環境が、内地との比較において必ずしも競争的とはいえない環境であったとの指摘については本稿ですでに紹介した通りである。とはいえ、1940年のオリンピックをむしろチャンスと見なし、マラソン・長距離・原住民選手が有望視され、東京大会を迎えるために——同大会を迎えるからこそ——その強化が叫ばれるようになっていた点は重要であろう<sup>1)</sup>。ただ、同じ外地である朝鮮では、孫基禎や南昇龍など、マラソンで金メダルをもたらした選手がいた反面、台湾人選手でそうした榮譽に輝く者が出ることはなかった。

だが、それは決して、メダルに輝く榮譽を享受することになった選手だけが後世に記憶され続ける資格を持つということにはならないであろう。周知の通り、近代オリンピックの始祖・クーベルタン男爵も、オリンピックは勝つことよりも参加することに意義がある旨を述べていた。このことはオリンピックの意義を再確認しつつ、競技に挑戦し続けた選手個人への関心を今一度呼び覚まし、スポーツを通じた国家威信の構築・宣伝に彼らがいかに寄与したかではなく、入れ替わり変容する国家と身分の下で、競技を通していかに彼らが自己の生存空間の拡大を図ろうとしたのか、そうした彼らの主体性にかかわる理解を深めることの重要性を改めて問うているのではないだろうか。

漢人選手であれば張星賢や林月雲、原住民選手であればラケナモやカサブブラウなど、活躍の可能性が見込まれていた選手もいたものの、先述した朝鮮選手のように、オリンピックの表彰台に立ち、後世まで記憶される台湾人選手が現れなかったことは事実である。しかしながら、勝利至上主義の観点からは忘却される運命にしかない選手も、そうした彼らの置かれた状況および条件の下で奮闘した、その存在を記録し、記憶し続けることの意義は少なくないであろう。それは、歴史の

連続性のなかから思考し続けていくことによって、戦前戦後の二つの異なる時代を生き抜いた選手個人の再発見のみならず、かつての帝国という空間に包含されていた多様性と、そうした空間のなかで強いられる制限と制約の下にあっても、自己の限界と可能性に挑戦し続けた選手の主体性を再び発見することにもつながるからである。

【付記：本稿は、2018年11月11日に日本大学で開催された科研ワークショップ（代表：三澤真美恵）にて報告した内容に大幅な加筆修正を加えたものである。調査の過程においては、葛高德夫妻・葛三郎夫妻、曾菊江氏・曾文光氏に加え、花蓮市公所の林仲川秘書および曾雅婷原住民行政課長から多大なご支援を賜ったほか、日本体育大学の富田幸祐助教より多くの便宜を図っていただいた。記してお礼を申し上げます。】

#### 注および引用・参考文献

- <sup>1)</sup> 日本統治下における「台湾代表」選手には、厳密に言えば「湾生」（台湾生まれの日本人）や「内地」出身の選手もいた。本稿が対象とする1930年代後半には、例えば、棒高跳の高野惣太郎（台南、東京大会代表第二候補に選出）、十種競技の淵田信造（台北、東京大会代表第二候補に選出）、中距離の西川進（台南）や船田幸一（台中）、短距離の大間知静子（台北）、といった優秀な成績をあげていた選手もいたが、本稿では台湾人選手を当時の呼称でいう「本島人」（漢族）および「高砂族」（先住民族）選手に限定してとりあげることにしたい。
- <sup>2)</sup> 〈東京オリンピック〉には、1938年7月15日に返上され、実現しなかった1940年の東京大会と、戦後に実現をみた1964年の東京大会がある。本稿では括弧つきでの表記とすることで、未実現のものも含めた二つの東京大会を指す用語としたい。

- 3) 同分野の古典的・代表的研究には次のようなものがある。木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院, 1970年。高津勝『日本近代スポーツ史の底流』創文企画, 1994年。坂上康博『権力装置としてのスポーツ—帝国日本の国家戦略』講談社, 1998年。菊幸一編『中村敏雄著作集 第6巻 スポーツの比較文化学』創文企画, 2008年。土佐昌樹編『東アジアのスポーツ・ナショナリズム—国家戦略と国際協調のはざままで』ミネルヴァ書房, 2015年。
- 4) 近年においては高嶋航による研究成果が代表的である。高嶋航『帝国日本とスポーツ』塙書房, 2012年。高嶋航『軍隊とスポーツの近代』青弓社, 2015年。アジアにおける政治とスポーツについては、次の研究が示唆に富む。シュテファン・ヒューブナー（高嶋航・富田幸祐訳）『スポーツがつくったアジア—筋肉的キリスト教の世界的拡張と創造される近代アジア』一色出版, 2017年。
- 5) 1940年の「幻の東京オリンピック」および同時代を対象とした研究には、先駆的な研究として、坂上康博・高岡裕之編『幻の東京オリンピックとその時代—戦時期のスポーツ・都市・身体』（青弓社, 2009年）、高嶋航「戦時下の平和の祭典—幻の東京オリンピックと極東スポーツ界」（『京都大学文学部研究紀要』第49号, 2010年3月, 25-72頁）のほか、次のようなものがある。橋本一夫『幻の東京オリンピック』日本放送協会出版, 1994年。Sandra Collins, *The 1940 Tokyo Games: The Missing Olympics: Japan, the Asian Olympics and the Olympic Movement*, London: Routledge, 2007。歴史社会学の視角からは池井優などの研究や、メディア史の視角による最新の成果としては、浜田幸絵『〈東京オリンピック〉の誕生—1940年から2020年へ』（吉川弘文館, 2018年）などがある。
- 6) 朝鮮神宮競技大会, オリンピックと朝鮮人選手については、金誠『近代日本・朝鮮とスポーツ—支配と抵抗, そして協力へ』（塙書房, 2017年）がある。その他、教育政策の観点からは、西尾達雄『日本植民地朝鮮における学校体育政策』（明石書店, 2003年）などがある。
- 7) 日本統治時代, 台湾に住む漢族には「本島人」、先住民族には「高砂族」の呼称が用いられていたことから、本稿でも適宜これらを歴史的用語として用いる。なお、後者に関しては、日本語では「先住民族」の語を用いるべきではあるが、今にちの台湾では「台湾原住民」が正式名称となっているため、本稿でも中国語の用法に依拠して「原住民」の語も使用する。
- 8) 台湾身体文化学会による『台湾百年体育人物誌』シリーズは2006年からこれまで第12集まで刊行され、主要な台湾人選手や運動界で貢献した人物が網羅的に紹介されている。日本統治下台湾における体育・スポーツの発展については、林丁国『観念, 組織と実践—日治時期台湾体育運動之発展』（新北：稻郷出版社, 2012年）や鄭国銘「日治時期台湾社会体育組織及其運作的歴史考察」（国立台湾師範大学博士論文, 2009年）も参考になる。
- 9) 張星賢は早稲田大学在籍中に日本代表に選出され、1932年のロス大会および1936年のベルリン大会に出場した。張星賢に関しては次のような研究がある。雷寅雄「第一位参加奧運匹克運動大会的台湾人—張星賢」曾瑞成総編輯『台湾百年体育人物誌』台北：台湾身体文化学会, 2006年, 35-53頁。林玫君「太陽旗下的鉄人—張星賢的田径世界」『台湾教育史研究会通訊』第49号, 2007年3月, 8-20頁。同「身体的競逐与身分的游移—台湾首位奧運選手張星賢的身分認同之刑塑与糾葛」『思与言』第47卷第1期, 2009年3月, 127-214頁。その他、ジャーナリストによるものとして、蘇嘉祥『運動巨人張星賢—第一位参加奧運的台湾人』（台北：聯経出版, 2008年）があるが、同書の出版も、2008年の北京オリンピックに



あわせて刊行されたものであった。

- 10) 1949年に国共内戦に敗れて中華民国は台湾に中央政府を移転させたが、国連の議席は1971年まで保有し続け、1979年まではオリンピックへの参加は中華民国の名義であった（以後は中華台北）。ただ、1960年（ローマ大会）、1964年（東京大会）、1968年（メキシコ大会）の3回に限り、「台湾」の名義で出場した。『中国時報』2018年3月15日、第A5版。
- 11) なお、そこでは日本統治下の差別的待遇に反発を覚え、独自に「北星」陸上チームを組織して日本人に抵抗した高何土のような選手たちの存在も忘れてはならないだろう。雷寅雄「台湾田徑之神—高何土先生」曾瑞成総編輯『台湾百年体育人物誌』台北：台湾身体文化学会、2006年、21-33頁。
- 12) 『東京朝日新聞』1932年5月30日、7面。
- 13) また、同大会には、日本に抵抗して「満州国」代表となることを拒んだ劉長春が、唯一かつ初の中華民国代表として参加していた。
- 14) 両大会の位置づけとして、建功神社競技会は「台湾のオリンピック」、明治神宮体育大会は「日本のオリンピック」と呼ばれる大会であった。
- 15) その際、早大出身の社会運動家である楊肇嘉による金銭的支援を得たことで進学が実現したという。雷寅雄、前掲論文「第一位参加奧運匹克運動大会的台湾人—張星賢」、38頁。
- 16) 400メートルハードルに出場した際の張の様子については、当時の様子が実況中継さながら以下のように伝えられていた。

○400米障害 日本軍の先陣をうけたまはる張君は頑張れ!! 頑張れ!! の声援でスタートについた。此の組にはパリ大会の覇者米国のテラーが居る。張君大いに頑張つたが9台目ハードルでよろめいた時ギリシヤのマンジカに惜くも抜かれ4着になる。

横井春野『陸上競技通になるまで』野球界社、1932年、241-242頁。

- 17) ただし、帝国日本の対外膨張とともに、台湾人でありながら満州チーム代表となることについては大きな矛盾を孕んでいた。1942年の満州国建国十周年記念東亜競技大会では、同じ台湾出身の王象が日本代表、林朝権、董錦地、楊基榮、張立三郎が中国（日本の支配下にある中華民国臨時政府）代表として出場し、満州チームの張と競い合ったが、張自身もそうした矛盾とアイデンティティの葛藤に苦しんでいた。この点については、張の自伝を用いた次の研究を参照されたい。林玫君、前掲論文「身体的競逐与身分的游移—台湾首位奧運選手張星賢の身分認同之刑塑与糾葛」、127-214頁。
- 18) 『東京朝日新聞』1936年5月26日、2面。
- 19) 十種競技の第一候補に選出されたのは、張星賢（関東州）と鹿内漁吉（朝鮮総督府鉄道）の2名で、ともに早大競走部OBであった。『陸上日本』第87号、1938年4月、10頁。
- 20) その翌年の1939年には、東京大会返上の代替処置として、日本・満州国・華北による「日満華大会」が開催されたが、その具体的経緯については高嶋航の論稿に詳しい。高嶋、前掲論文「戦時下の平和の祭典—幻の東京オリンピックと極東スポーツ界」、25-72頁。前述のように、同大会の中華代表は、張立三や董錦地などの台湾出身が中心であった。
- 21) 日本陸上競技連盟編『日本陸上競技史』日本体育社、1956年、25頁。
- 22) 『陸上日本』第87号、1938年4月、10頁。
- 23) 兵明田は台南生まれ。早稲田大学では競走部に所属し、1937年に卒業している。砲丸投げで数々の記録を作り、帰台後は台南二中で体育教員を務める傍ら、1985年まで審判員として台湾の運動界に貢献した。2002年1月7日に89歳で死去している。『中華日報』2003年1月8日、第23版。
- 24) 張啓震は1913年生まれ。1940年の時点で台中の豊原信用組合に勤務し、戦後も台中で陸

上競技の審判などに携わっていたようである。

- 25) 張立三郎は1917年生まれで台中州彰化郡(現:彰化県)出身。戦後も張立三(または張立郎)の名で台湾省運動会に参加し、棒高跳や三段跳などで台湾記録を打ち立てた。1951年11月7日に彰化の自宅で34歳の若さで病死している。『聯合報』1951年11月12日、第5版。
- 26) 黄瑞雀は、林月雲とならび、台湾人選手として東京大会の第二候補に選出されていた人物である。なお、黄については、1938年に陽春高雄高等女学校を卒業後、家庭の都合で進学できず、鳳山郡九曲堂公学校の教員となったことが報道されていた。その新聞記事では、「教職に就く傍ら、一生懸命競技に精進し、来るべきオリンピック東京大会には台湾陸上競技界のため大に活躍します」との自身の弁が紹介されていた。『台湾日日新報』1938年3月18日、8面。『台湾日日新報』1938年4月8日、8面。
- 27) 詳細な経歴が得られていないが、王象(中距離)と林和引(長距離)はともに1930年代後期にかけて早稲田大学競走部に所属して競技を行っていた。同部の資料では、林和引は1938年に、王象は1940年に卒業している。王象は「日本一流のクォーターマイラー」と称されるほどの実力を有する選手であった。なお、林和引は台湾を代表する企業である東元電機の創業者の1人である。早稲田アスレチック倶楽部編『早稲田大学競走部七十年史』早稲田アスレチック倶楽部、1984年、127頁、136頁。『台湾日日新報』1938年4月8日、8面。『中国時報』2016年10月7日、第A5版。
- 28) 林月雲の経歴については、主に次の論稿を参照した。金湘斌・徐元民「追求奧運的台湾女性先驅者 林月雲」程瑞福総編輯『台湾百年体育人物誌 第四輯』台北:台湾身体文化学会、2008年、91-126頁。
- 29) 同大会での女子競技の導入は、1926年にハー

グで開催された国際アマチュア陸上競技連盟の総会で決定された。女子の体力を養成するために有益であるとドイツが賛成を強く主張し、フランス、スイス、アメリカ、ノルウェー、オランダ、ギリシャなど12カ国が賛成とした。一方、女子の陸上競技が身体的・精神的にも過激であるとして、イギリス、フィンランド、オーストラリア、ハンガリー、アイルランドの5カ国が反対を唱えた。野口源三郎『第九回オリンピック陸上競技の研究』目黒書店、1929年、275-284頁。

- 30) また、進学に際しては張星賢の手助けもあったという。金湘斌・徐元民、前掲論文、92頁。
- 31) 100メートル走1位は同タイム(12秒9)の白井寿美子(東海)、80メートルハードル1位は12秒6の田中久子(北海道)で、林月雲の記録は12秒7の僅差であった。明治神宮体育会編『第八回明治神宮体育大会報告書』明治神宮体育会、1936年、93-396頁。
- 32) 林月雲自身の説明によれば、急性肺炎罹患後に無理をおして最終の予選会には参加したものの、ベストのコンディションではなかったことから、成績は100メートル走で3位、80メートルハードルで2位に終わった。女子はわずか1名のみでの選出であったため、結局彼女のベルリン大会参加はかなわなかった。『民生報』1980年3月5日、第3版。
- 33) 勤務したのは、斗六公学校、長栄中学校、台中州立彰化高等女学校、台中高等女学校など。同上。
- 34) 『聯合報』1992年6月19日、第19版。
- 35) 同上。
- 36) 平沢平三は1919年に東京高等師範学校体育科を卒業後、台北工業学校教官となり、その活躍は「揺籃時代の本島運動界の発展のために大いに貢献」したと評されていた。その後、東京一中、大阪高校、天王寺中を経て再度1933年から台北高等学校教官として台湾に赴任していた。なお、台湾体育協会では鈴木実(鉄

- 道部)と同じく陸上競技部幹事を務めていた。『台湾日日新報』1934年1月8日, 7面。
- 37) 平沢平三「台湾の競技雑感」『陸上日本』第87号, 1938年4月, 74頁。
- 38) 同上, 75頁。
- 39) 同上, 75-76頁。
- 40) 同上, 76-77頁。
- 41) 同上, 77頁。
- 42) この点について平沢は、「審判を委嘱されて確答をしておきながら, 出席しないのは失礼この上もないこと」, 「本当に競技の発展を願ふ者であつたなら, どんな貧弱な競技会であらうとも, どんなに雨が降らうとも進んで審判の労をとつてやるべきでせう」と戒めたうえで, 「審判, 選手揃つて協議会を立派にやる時始めて立派な記録も作られ競技の発達も遂げられるのであります」と断じていた。同上, 78-79頁。
- 43) 村社講平「台湾コーチ巡り」『陸上日本』第87号, 1938年4月, 84-85頁。
- 44) 『大阪朝日台湾版』1935年12月22日, 5面。
- 45) 老婆生「東京大会と台湾の陸上」『台湾日日新報』1936年10月13日, 3面。
- 46) 1937年度の台湾体育協会の予算は, 総督府補助金が15,000円増額が認められたことで, 収入予算が31,517円と, 前年度予算(1936年度: 8,287円)から22,870円の増加となっていた。『大阪朝日台湾版』1937年4月3日, 5面。
- 47) 1937年7月10日と11日に台北帝大競技場を会場に開催された同大会では, 37度の猛暑が原因で関大選手の疲労が著しかったこともあり, 関大42点, 台湾66点で台湾チームの勝利に終わった。『台湾日日新報』1937年7月12日, 8面。
- 48) 『台湾日日新報』1938年6月10日, 8面。
- 49) 1937年3月14日に台湾体育協会陸上競技部が東京オリンピックに向けた対策を協議したが, そこでは, 内地一流大学チームの招聘などのほかに, 「オリンピック大会に対してマラソンおよび長距離競走は台湾としては有望視されてゐるので昭和十二年度からたゞちに有力選手の詮考, 強化に特に留意する」点が示されていた。『大阪朝日台湾版』1937年3月17日, 5面。
- 50) なお, なかには漢人に同化した平埔族や原住民の血をひく選手もいたはずであるが(例えば, 兵明田や紀政など), ここではそうした人物は含めないことを断っておく。
- 51) ほかに, 同じ花蓮港のアミ族の選手で, カサウ, アホトホ, チロナカウ(チロオナカホ), アボアダワンなどの名前が長距離種目に確認できるが, 実績としてはカサウブラウとラケナモが圧倒的な強さを誇っていた。
- 52) 『台湾日日新報』1938年4月29日, 8面。
- 53) 1位はラケナモであった, 『台湾日日新報』1935年9月29日, 12面。
- 54) 1937年9月26日に行われた台湾初のマラソン大会は, 台北帝大競技場を出て新北投をまわり, 最後に帝大競技場へと戻るルートであった。花蓮港からカサウブラウとカサウの2名が, その他に薛頗と小野利保の2名が参加して争われたが, 後者3名は途中棄権となりカサウブラウが3時間22分で優勝, 明治神宮体育大会への出場が決まった。宮城多慶雄「台湾最初のマラソンを観る—小林総督盃は花蓮港のカサウブラウ君獲得」『台湾鉄道』第305号, 1937年11月, 46-56頁。
- 55) 記録は, ラケナモが34分23秒4, カサウブラウが36分59秒2であった。『大阪朝日台湾版』1937年7月13日, 5面。
- 56) 台湾側ではこれを快挙と見なし, 『台湾日日新報』は「3時間を切る大記録」として以下のように報道していた。  
カサウブラウ君のマラソンは2時間52分25秒で第10位であつたが, 台湾の新記録であつた, 金栗氏は「彼の将来は非常に有望なり」と激励してゐた…  
『台湾日日新報』1937年11月3日, 8面。

- 57) 同上.
- 58) 『台湾日日新報』1937年12月1日, 8面.
- 59) 1938年9月に開催された台湾体育協会花蓮港支部主催の陸上競技大会で, カサウブラウは3時間12分35秒の台湾新記録を出して1位となっている. 『大阪朝日台湾版』1939年9月25日, 5面.
- 60) 『大阪朝日台湾版』1939年10月3日, 5面.
- 61) 『台湾日日新報』1940年2月8日, 8面.
- 62) 同記事は「鉄道部ラケ(蕃人)が五千米で新記録」との見出しであったことから, すでに花蓮港鉄道部で勤務していたことがわかる. 『台湾日日新報』1932年8月30日, 8面.
- 63) ラケナモについては, 「沈滞の殻を破り本島長距離界は國澤, ラケナモの二雄によつて大道が開拓されることを信ずる」と評されていた. 『台湾日日新報』1932年10月15日, 6面.
- 64) 『台湾日日新報』1934年11月23日, 8面.
- 65) 『大阪朝日台湾版』1935年12月22日, 5面.
- 66) 『台湾日日新報』1935年9月29日, 12面.
- 67) 『台湾日日新報』1936年11月23日, 8面.
- 68) 『大阪朝日台湾版』1936年11月24日, 5面.
- 69) 報道では, 「花蓮港オリムピック選手後援会では東京大会目ざして日夜必死の努力をつづけてゐるが, 花蓮港長距離界の至宝ラケナモ君は去る二十九日花蓮港グラウンドに於て五千米十五分三十五秒八の新記録を樹立して自己の保有する十五分四十六秒六を十秒八に短縮した, また本年一月三十日同一のグラウンドで作った世界の村社の十五分四十二秒八の台湾新記録を七秒更新した」とその快挙が説明されていた. 『台湾日日新報』1938年4月2日, 8面.
- 70) 森岡二郎(1886-1950年)は奈良県生まれ. 1911年に東京帝国大学卒業後, 兵庫県警部に任官, その後警視庁刑事部長, 同官房主事, 京都府内務部長となる. 1926年に島根県, 青森県, 茨城県, 栃木県の知事を歴任し, 同年に朝鮮総督府警務局長, 内務省警保局長となつた後に台湾総督府総務長官となる(在任は1936-1940年). 日本野球連盟初代会長. 日外アソシエーツ株式会社編『昭和人物事典 戦前期』日外アソシエーツ, 2017年, 779頁.
- 71) 『大阪朝日台湾版』1937年1月21日, 5面.
- 72) 選出された選手は次の通り. 男子の部【短距離】杜火倫(台北), 張啓震(台北), 中村麒児郎(台中), 山崎喜弘(台北), 根目沢正紀(台中), 王象(台中)【中距離】石橋節夫(台北), 【長距離】ラケナモ(花蓮港), 張水源(新竹), アホトホ(花蓮港), 小野利保(台北)【跳躍】高野惣太郎(台南), 長友一馬(新竹), 前田滋雄(新竹), 林丙丁(台中)【投擲】加藤芳雄(台南), 柏分忠一(台中), 【十種】高野惣太郎(台南), 淵田信造(台北) 女子の部【短距離】斎藤ふみ子(基隆高女), 中川原澄子(台南一女)【障碍】中川原澄子(台南一女), 斎藤ふみ子(基隆高女)【中距離】氏川ミチ子(高雄高女)【跳躍】富指宿ミサヲ(台南一女), 破魔芳枝(基隆高女)【投擲】黃氏瑞雀(高雄高女), 吉田芳子(台北二女), 倉岡田鶴子(台南一女). 『台湾日日新報』1937年3月16日, 2面.
- 73) 同上.
- 74) 同記事は, 森岡長官がアミ族のなかから東京大会に向けてオリンピック代表を出したいとの希望から, 1937年3月5日に花岡山で開催された初回の競走会について報じていた. ただし, 同大会にラケナモは参加していなかった. 『大阪朝日台湾版』1937年3月10日, 5面.
- 75) 記事では, 「体協花蓮港支部ではオリンピック東京大会に際し東台湾の誇りともいふべき高砂族の長距離選手を送る目的でこん度オリンピック選手養成後援会を組織」したことが報じられていた. 『大阪朝日台湾版』1937年5月19日, 5面.
- 76) 『大阪朝日台湾版』1937年7月21日, 5面.
- 77) 同上.
- 78) 例えば, 1937年9月には, ブラジルで発行さ

れていた日本語新聞『伯刺西爾時報』でラケナモについて次のように記されていた。

来るべき東京オリンピックの中、長距離はわれらの足で、と台湾花蓮港でラケナモほか5名の高砂族選手が練習を開始したが、近く村社選手をコーチに招聘して合宿すると冲天の意気

『伯刺西爾時報』1937年9月30日、4面。

<sup>79)</sup> 『大阪朝日台湾版』1938年1月21日、5面。

<sup>80)</sup> 『大阪朝日台湾版』1938年2月2日、5面。

<sup>81)</sup> 村社講平「台湾コーチ巡り」『陸上日本』第87号、1938年4月、84-85頁。

<sup>82)</sup> 「グラフページ 異色台湾軍の双璧」『陸上日本』第91号、1938年8月、14頁。

<sup>83)</sup> 『大阪朝日台湾版』1938年3月29日、5面。『大阪朝日台湾版』1938年4月26日、5面。

<sup>84)</sup> 日本陸上競技連盟編、前掲書、32頁。

<sup>85)</sup> そのほかには、「防毒面着用競争」、「参拝競争」などがあった。『大阪朝日台湾版』1938年4月17日、5面。『大阪朝日台湾版』1938年5月4日、5面。1938年から実施されるようになった「陸上戦技」については次を参照。森田俊彦『陸上戦技』愛之事業社、1938年。日本陸上競技連盟編、前掲書、39-40頁。

<sup>86)</sup> 『大阪朝日台湾版』1939年5月12日、5面。

<sup>87)</sup> 『台湾教育』第459号、1940年10月、84頁。

<sup>88)</sup> 厚生省編『紀元二千六百年奉祝 第十一回明治神宮国民体育大会報告書』厚生省、1941年、271頁。

<sup>89)</sup> 出身別のチームは、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州、朝鮮・台湾、満州の8チームであり、朝鮮・台湾チームが55時間2分32秒で優勝し、その成績は2位の関東を12分5秒引き離すものであった。日本陸上競技連盟編、前掲書、36頁。

なお、チームの構成員は次の通り。朝倉充、大山祐、朝山慶一、韓駟進、李振燮、武本雲植、梁任得、宮崎久助、李鐘祿、松平永煥、呉昌濬、木本在夫、金道植、ラケナモ、西崎幸一、日

向武夫、オリオル、小野利保、別所和雄、薛頗。ラケナモは3日目の第6区（別府警察署から門司駅まで）および9日目（姫路練兵場から大阪大手前まで）第2区の区間優勝者であった。厚生省編、同上、556-561頁。『大阪朝日台湾版』1940年11月20日、6面。『大阪朝日台湾版』1940年12月6日、6面。

<sup>90)</sup> 日本陸上競技連盟編、前掲書、40頁。

<sup>91)</sup> 筆者は、2018年12月4日に花蓮市公所の協力により、カサウブラウの遺族（次男の葛高德氏および三男の葛三郎氏）とラケナモの遺族（長女の曾菊江氏および次男の曾文光氏）を特定し、花蓮市内のそれぞれの自宅において聞き取り調査を行った。記述の内容は当日の聞き取りによるものである。

なお、その際にうかがったラケナモの経歴については次の通り。1908年6月7日に花蓮東部・富田（現：光復郷太巴塢〈タバロン〉）のアミ族の家に生まれ、同地の学校を卒業した（おそらく太巴塢蕃人公学校〈現：太巴塢国民小学〉と思われる）。16歳ごろに花蓮港の地域運動会で中長距離の種目に出場して優勝を勝ち取り、台東で開催された大会でも優秀な成績を残した。これらの功績が日本人の運動競技関係者の目にとまり、抜擢されて17歳の時に花蓮港鉄道部に就職することになった。就職当初は玉里での勤務だったが、練習環境が不十分なために18歳の時に花蓮駅に異動となった。住居は花蓮港鉄道部の寮で、同宿舎での生活は、後に結婚した後も続いたとのことである。

<sup>92)</sup> 葛三郎は、父親が短距離走で足が速かったと記憶していたが、日本および台湾の陸上競技界で記録を残す選手であったことについては、筆者が訪問してそのことを伝えるまで知らなかった。彼は、自身の優れた運動能力のDNAが日本時代の父親の活躍に求められることを知り、深い感慨を覚えたようであった。

<sup>93)</sup> 葛三郎は省立体育専科学校を卒業後に警察官

となったが、陸上競技を続け、定年後はマスターズで幾度も優勝を果たしている。『聯合報』2015年4月23日、B2版（宜花綜合新聞）。

- <sup>94)</sup> 「原住民重要田径運動選手名録（1）」『山海文化双月刊』第8期，1995年1月，48頁。
- <sup>95)</sup> 上海で開催された同大会の台湾代表陸上選手に「曾富勝」の名は確認できるが、入賞は逃していたようである。同大会では陸上競技での優勝を始め、総合成績でも優勝を果たすなど、台湾代表が大活躍した。同大会に参加した台湾人選手については次を参照のこと。林智煒・林玫君「1948 滬上傳奇—台湾省運動代表隊參加第七屆全國運動會之歷史考察」『身体文化學報』第13輯，2011年12月，81-110頁。
- <sup>96)</sup> ラケナモの遺族である長女の曾菊江氏と次男の曾文光氏によれば，1964年の東京オリンピックが開催された時，周りに対して父親が特に何か言っていたような記憶は残っていないとのことであった。それでも，酒に酔った時などは，「日本時代にもし東京オリンピックが開かれていたら，自分も出場できていたかもしれない」と漏らすことはあったという。曾菊江氏・曾文光氏への聞き取りによる（2018年12月4日）。
- <sup>97)</sup> その理由としては，①日本統治下ではカタカナの部族名が，戦後には新たに漢字による中国名が用いられていたこと，②漢民族の選手と異なり，戦後も競技を継続し競技指導者となっていた者がほとんどいなかったため，日本語を解さない戦後の研究者がその存在を突き止めることが容易でなかったこと，などが考えられよう。
- <sup>98)</sup> 中国側のオリンピックに関する史料でも，楊伝広を「中国台湾」選手と位置づけ，「彼はオリンピックで初めて中国にメダルをもたらした人物」であるとして，中国人初のオリンピックメダリストと称している。劉修武主編『奧林匹克大全』北京：人民体育出版社，1988年，144頁。

- <sup>99)</sup> 鄭国銘「永遠的十項冠軍—楊伝広（1933-2007）」行政院体育委員会編『中華民國建国100年体育專輯 体育人物誌』台北：行政院体育委員会，2011年，156頁。なお，別の文献によれば「馬山」と呼ばれていたとされる。雷寅雄「亞洲鉄人楊伝広」程瑞福総編輯『台湾百年体育人物誌 第三輯』台北：台湾身体文化学会，2008年，7頁。
- <sup>100)</sup> 雷寅雄，同上，15頁。
- <sup>101)</sup> 同上，20頁。金メダルに輝いたアメリカ代表ジョンソンとの伝説的な競い合いについては多くの文献でも紹介されている。
- <sup>102)</sup> 同上，27頁。
- <sup>103)</sup> 日本側で刊行された東京オリンピックの記念誌にも，「十種競技で金メダル候補の楊伝広選手も不調で5位」と大きく紹介されており，当時楊に対してかけられていた期待度の大きさを物語っている。日本体育協会監修『第18回オリンピック東京大会』日本体育協会，1965年，43頁。
- <sup>104)</sup> 雷寅雄『台湾光復後田径運動發展之研究』中華民國田径協会，1988年，628頁。この文献で原因は「風邪」としか説明されていない。
- <sup>105)</sup> 主に，自身も楊から直接話を聞いたという雷寅雄の文献を中心に参照した（雷寅雄，前掲論文「亞洲鉄人楊伝広」，32頁）。なお，この「真相」は，東京大会から17年後に日本の週刊誌『諸君！』誌上に掲載されたインタビューで楊自身が日本人ジャーナリストに初めて明かした内容とされ，それはただちに台湾でも報道された（『中国時報』1981年10月3日，第3版）。この早瀬利之によるインタビューはきわめて詳細な内容であるが，同文では問題の飲み物が「ジュース」とされる一方，雷によれば「風邪薬ドリンク」となっており，双方には記述に食い違いが見られる（別文献では「偽オレンジジュース」。瑪佳有限公司編輯『體壇精英口述歷史叢書—亞洲鉄人 楊伝広』台北：行政院体育委員会，2011年，92頁）。詳しくは

次を参照。早瀬利之「アジアの鉄人 楊伝広 17年目の告白」『諸君!』11月号, 1981年11月, 132-161頁。

<sup>106)</sup> 馬晴山は当時38歳であったが、10月23日午後、在日華僑総会に亡命を求めた。馬は中国東北(旧満州)の生まれで、両親が中国にいるため亡命を図ったとされる。『毎日新聞』1964年10月24日, 1面。

<sup>107)</sup> 楊伝広は東京大会の失敗により多くの批判にさらされ、失意のうちに現役を引退した。その後は映画に出演し、体育関連設備の充実化を呼びかける募金活動「一人一元運動」を發起するなどしたが、期待された成果はあがらなかった。1983年には国民党籍の立法委員となるものの、再選は果たせず、続いて民進党から台東県長に立候補して落選した。自身は単身高雄・左營で後進の陸上選手(李福恩や古金水など)の育成に従事するなどしていたが、妻と子女はアメリカで離れて生活し、孤独な晩年を過ごした。2007年1月に肝臓癌と中風により、一時滞在先のアメリカ・ロサンゼルスにて74歳で死去した。瑪佳有限公司編輯, 前掲書, 94-137頁。

<sup>108)</sup> 呉阿民は1968年に日本体育大学で、1970年に東京教育大学でも競技に関する学びを深め、1972年に帰台後は国立台北工業專科学学校(現:国立台北科技大学)の教員を2003年の定年退職まで務めた。呉阿民については、主に次の論稿に依拠した。高銘甫・林国棟「台湾田径魂 十項運動金牌選手 呉阿民」林伯修総編輯『台湾百年体育人物誌 第十輯』台北:台湾身体文化学会, 2015年, 158-179頁。

<sup>109)</sup> 瞿海良「台湾原住民的九千分双一百」『山海文化双月刊』第8期, 1995年1月, 17頁。

<sup>110)</sup> 高銘甫・林国棟, 前掲論文「台湾田径魂 十項運動金牌選手 呉阿民」, 160頁。

<sup>111)</sup> 同上, 161頁。

<sup>112)</sup> 呉阿民は東京大会から4年後の1968年に開催されたメキシコ大会にも出場したものの、同

大会では15位に終わった。同上, 162-164頁。

<sup>113)</sup> 農家に生まれた紀政は、新竹で中学まで過ごし、高校を台北と苗栗で学んだ。その後、公費でアメリカにスポーツ留学をし、短大から編入してカリフォルニア州立工科大学ポモナ校を卒業した。主要な国際大会での成績は、1966年第5回アジア大会金メダル(走幅跳)、銀メダル(400mリレー)、1968年メキシコ大会銅メダル(80mハードル)、1970年第6回アジア大会金メダル(100m)など。国政でも立法委員として活躍し、2004年に台湾の国立清華大学から名誉博士号を授与される。紀政については、主に次の論稿に依拠した。雷寅雄「飛躍的羚羊 紀政」林政君総編輯『台湾百年体育人物誌 第六輯』台北:台湾身体文化学会, 2011年, 184-207頁。

<sup>114)</sup> 紀政の出生時はまだ日本統治時代であったことから、本来は「紀文子」と命名された。だが、翌年に台湾が中華民国となり日本式の名前が好まれなくなったため、父親は「紀文」にしようとしたが、「祭文」と同音のため困り果てた末に「紀改」で届け出たところ、役所の職員が「紀政」と誤って登録し、この名前となったという。瑪佳有限公司編輯『体壇精英口述歴史叢書—飛躍羚羊 紀政』台北:行政院体育委員会, 2011年, 22-23頁。

<sup>115)</sup> とはいえ、紀政の出した4,229点は台湾とアジア双方における新記録であった。雷寅雄, 前掲論文「飛躍的羚羊 紀政」, 195頁。

<sup>116)</sup> 同上, 197頁。

<sup>117)</sup> 従来の「中華台北」ではなく「台湾」名義での参加に「名を正す」べく、紀政が全面に立って2018年11月に賛否を問う住民投票が実施された。だが、実現されれば選手の試合参加が危ぶまれる事態が報道されたこともあり結果は否決となった。『聯合報』2018年12月31日, 第A14版。

<sup>118)</sup> 楊伝広や紀政の後に台湾人選手がオリンピックでメダルを獲得したのは、1984年のロサン

ゼルス大会のことであった。野球とウェイトリフティング（蔡温義）で銅メダルであった。

<sup>119)</sup> また、戦後との連続性を考えた場合、張星賢や林月雲はもちろんのこと、楊基榮（省立師範学院教員）、董錦地（屏東師範学校教員）、

廖漢水（省立台湾体育専科学学校教員）など、戦後台湾の体育教育や競技界における人材育成に多大な貢献を果たしたのも、この時期に現役選手として活躍した人物が少なくなかった。

（受理日：2019年4月16日）